

<牧会ミニ通信>No.17 2020. 8. 16

「8月は、6日、9日、15日」との川柳があります。

つれづれなるまま、思い出せるまますを記しておきます。

1939年・昭和14年、東京大森の下町に生まれました。二年後、父の仕事の関係で、横浜市鶴見区東寺尾の社宅に移り住みました。松の大木と桜の木に囲まれた古い家でした。その年の12月8日です、「大本営発表」があり、日本は英米に宣戦布告をしました。はじめは「勝った。勝った。」でしたが、戦局は次第に傾きはじめ、ミッドウェー沖海戦で大敗し、南洋諸島では玉砕しておりました。本土決戦が迫り、学童疎開が始まりました。わたしの父は「白紙招集令状」(内地勤務)であり、幼いわたしは両親の許におりましたが、兄や姉たちは田舎に疎開しました。

チャイムと共に臨時ニュースが流れます。「ただいま、浦賀水道沖に敵機B29、2機通過」一、こうしたアナウンスが頻繁となりはじめました。

1945年3月10日、B29爆撃機・325機が真夜中飛来し、首都圏は壊滅状態になりました。工場地帯には大型爆弾、住宅街には焼夷弾です。

爆弾が破裂すると、爆風と共に、つむじ風が起り、しばらくして黒い雨がポトポトと降りはじめます。焼夷弾は、ゼリー状にした石油を布にしみこませ、筒に詰め込んだものです。2時間半の空爆により、死者10万人。被災者100万人。焼失家屋30万戸。東京の上空は真っ赤に染め上がりました。

米国の新鋭戦闘機グラマンの機銃掃射で、わが家のトタン屋根はバリバリと撃ち抜かれ、お隣の住人はそれで亡くなりました。幼いわたしは、防空頭巾を被り、防空壕の中でガタガタと震えていました。ある時、墓地にB29が胴体ごと墜落しました。硝煙クスぶる機体に近づいてみれば、あたり一面に飛行機の部品が散乱しており、米兵の胴体がエンジンに、めり込んでいるではありませんか。足元にドロップの缶を見つけて、急ぎポケットに入れました。宝石の輝きに思われました。食べるものに窮して、ついには、焼け残った家の台所に侵入して、焦げ蒸した臭いコメを口にすることを覚えています。

周東のぞみキリスト教会：牧師 結城 晋次